

アニメ『ちはやふる』、特撮ヒーロー作品『仮面ライダーセイバー』、『海賊戦隊ゴーカイジャー』の音楽が極上のサウンドで奏でられた至福の一夜。



2021年12月3日、東京は中野区の「なかのZERO大ホール」で「作曲家山下康介 コーラスとオーケストラの世界」が行われた。

NHK朝の連続テレビ小説『瞳』（2008）や『花より男子』（2005）、特撮ヒーロー作品『仮面ライダーセイバー』（2020）、『海賊戦隊ゴーカイジャー』（2011）、ゲーム「信長の野望シリーズ」（09ほか）、アニメ『ちはやふる』（11,13,19）など数々の代表作を持つ、作曲家・山下康介の初の個展。公演に先駆けてはクラウドファンディングが実施され、期日前に目標金額を突破するなど、多くのファンの注目を集めていたことが証明される中、当日の公演を迎えた。

演奏は、富田勲、佐藤勝、渡辺宙明、渡辺岳夫、菊池俊輔など、映像音楽で知られる作曲家のコンサートを多数手がけてきた「オーケストラ・トリプティーク」、コーラスは国内外で活躍するオペラ歌手によって結成された「歌人三味サマディ」で、山下は「歌人三味サマディ」のために楽曲提供した縁があり、今回、彼らの存在がコンサート実現へ向けての大きな原動力となったという。

当日は、山下がこれまでに紡いできた名曲の数々が、自身のタクトによって演奏され、時

に雄大、時に繊細な音楽世界に多くの聴衆が聴き入った。いわゆる劇伴音楽は、スタジオの限られた時間の中、多い時には50~60曲単位の楽曲がクリック（ガイドリズム）に従って演奏されるのが通例であり、正直、そこに演奏の妙味や表現を加味して行く余地はない。今回はそうした制約から解き放たれ、山下の楽曲が本来持つべき姿、生演奏ならではの醍醐味を存分に感じ取ることができた。オーケストラの編成自体は、スタジオとほぼ同規模で決して大きくはなかったが、これが実に良く鳴る。山下といえば、オーケストラ編曲の分野でも各方面から高い評価を受けているが、その仕事を肌で知るまたとない機会ともなった。また、録音を前提とした劇伴では、シンセやエレキギターをオケに被せる場合もあるが、コンサートでやるとなるとPAが必須のこれらをオミットし、あくまで生音に拘ったことも正解であったと思う。

今回、何より注目に値したのが歌声の持つ力である。コンサートの開幕を飾った、堺裕馬のバリトンソロが掴みとなる合唱曲「Daybreak」(2021)をはじめ、トランペットとサクソスを内山有紀(ソプラノ)と下村将太(テノール)に置き換えて披露された『美の巨人たち』のエンディングテーマ「エターナルストーリー」(2012)、吉田美咲子(ソプラノ)、豊島ゆき(メゾソプラノ)による『ドラえもん のび太の太陽王伝説』のエンディングテーマ「この星のどこかで」(2000 ※作曲は大江千里)と、多彩な楽曲と声の魅力に引きこまれた。そして、レコーディングでも歌人三味サマディが歌った劇中歌「Timeless Story」を含む、『仮面ライダーセイバー』(2020)は、コーラスとオーケストラが混然一体と化し、作品が持つスケール感を見事に描き切った。通常、オーケストラの公演では、オーケストラが「主」で、コーラスは「従」であるが、今回は敢えて言うなら、どちらも「従」であり、公演タイトルに「コーラスとオーケストラの世界」と、銘打たれていたことにも納得のいくものがあった。

その他、サントラ未収録曲も含む『ちはやふる』、ゲストの中川英二郎のトロンボーンも冴え渡った『瞳』のメインテーマ、全6曲を通じて壮大なドラマ性を伝えた『海賊戦隊ゴーカイジャー』(2011)、また『花より男子』(2005)での、憂いに満ちた美しい旋律もまた心に響いた。

映像音楽、特にテレビの劇伴は、なかなか表に出難いジャンルである。番組のHPを見て「音楽」をクリックしても表示されるのはたいてい主題歌であり、劇伴の作曲家はスタッフの一覧に表示されているに過ぎない。また、あらゆる映像作品には当たり前のように音楽が付いているが、それ故に音楽の重要性がなかなか外部には伝わらないという、ある種のジレンマも抱えている。業界では引く手あまたであり、数々の代表作を持つ山下もまた、単体では取り上げ難い作曲家であったことも想像に難くない。しかしながら、山下のあまりある才能に着目し、大規模なコンサートが実現されたことは、大変意義のあることであ

る。まずはそのことにエールを送りたい。この機会に山下康介の存在、そして彼が紡いできた数々の名曲に今一度、注目が集まることに節に期待したい。

トヨタトモヒサ



©主催・企画：合同会社 P&ME 鷲尾裕樹

<https://p-and-me.com/>